

數命數如字、然則數奇命數不遇之謂也。杜子美云、數奇譎關塞、道廣存箕穎、白樂天詩云、文士多數奇、詩人尤命薄、唐人用數奇字、猶不鮮也。皆原乎李廣傳、以是謂之好茶技者、薄命不遇之人、故稱其室以爲數奇舍、與今俗誤奇作寄也。

〔木芽説〕茶といふもの、いとも上津代にはありとも聞えず、いづれのころよりか吾御國にはうゑそめけむ、さだかにゑるし傳ふるものなし、類聚國史に、嵯峨のみかどの弘仁といふ年のむとせの夏、近江國にみゆきまし／＼て、滋賀韓崎など見そなはし給ふみちのたよりに、ちかきわたり寺々にわたらせおはしましける時、梵釋寺の永忠大僧都、手づから茶を煮て奉られしに、みかどこれをいみじくよろこばせ給ひて、かづけものなど給はせつや、がてそのみな月に、五の内つ國をはじめて、近江丹波播磨などの國々におほせて、國ごとに茶をうゑしめて、とし／＼の貢ものにさだめ給へりしよしゑるされたり、わが御國にてこれを用ふること、こゝにさだかに見えれば、世の人まづこれを引出て、此時をそのはじめといひ傳ふめり。○中おなじ御時に撰び集めたる凌雲集に、みかど春宮の御方にわたらせおはしましける時、又冬嗣の大將の閑居院に、みゆきありしときなど、これをもてあそぶさまに作らせ給へりし御ふみもはやう見ゆれば、この近江のみゆきより事はじまれるにはあらで、其頃はや、世に用ひそめたりしことゑられたり。○中さてこれは湯に煮て用ふるが、まづはじめなりけむはいふも更なり、此ころはもはらさのみなん有べきと思はるゝに、茶をつくといふ詞も、此ころの詩にかつ／＼見えそめたるに、源順の和名抄にも、茶碾子といふものをのせて、世人はこれを茶研といひならふよしゑるされたる、これかれ合せておもひみれば、末茶なども、はやう好むまゝに、え出たりしにこそ、經國集にみゆる惟良のおもとが茶歌に、くれの鹽あちはひを和して味はひ更によしと作れりしは、さし鹽など用ひてのむ事も、はやそのかみ有けるにやと覺ゆ、また田口の忠臣が家集に、滋十三に茶をこ